

学習のポイント

目 次

第1課	文型	1
第2課	時制	4
第3課	態	9
第4課	不定詞	13
第5課	動名詞	19
第6課	分詞	26
第7課	関係詞	35
第8課	仮定法	41
第9課	助動詞	47
第10課	比較	53
第11課	名詞・代名詞・冠詞・形容詞・副詞	59

第1課 文 型

[1] 第1文型: S + V

John usually gets up at six-thirty in the morning.

S V

Mary ran to the station as fast as possible.

S V

[2] 第2文型: S + V + C

Mary is very kind to all her friends. (形容詞が補語)

S V C

My hobby is to collect stamps. (不定詞が補語)

S V C

The trouble is that he doesn't know how to do it. (名詞節が補語)

S V C

第2文型で用いられる動詞として、次のものをあげておこう。

become, get = 「～になる」, remain, stay = 「～のままであり続ける」
なお、次の動詞も補語として形容詞を取り、S + V + Cの第2文型を構成する。
smell ～ = 「～なおいがる」、taste ～ = 「～な味がする」、
look ～ = 「～のように見える」、
sound ～ = 「聞いた感じでは～のように思われる」

(例) The story sounds true.

S V C

「その話は聞いた感じでは本当のように思われる。」

[3] 第3文型: S + V + O

Mary likes music very much. (名詞が目的語)

S V O

I remember seeing him somewhere. (動名詞が目的語)

S V O

Jane believes that she will succeed in the attempt. (名詞節が目的語)

S V O

We don't know why he is absent today. (名詞節が目的語)

S V O

[4] 第 4 文型 : S + V + O + O

My father gave me this watch on my birthday. (名詞が直接目的語)
 S V O O

John told us that he had met Jane the day before. (名詞節が直接目的語)
 S V O O

Mary asked me if I would go there with her the next day. (名詞節が直接目的語)
 S V O O

第 4 文型で用いられる主な動詞として、次のものをあげておこう。

give A B = 「A に B を与える」,	tell A B = 「A に B を話す・教える」,
ask A B = 「A に B をたずねる」,	teach A B = 「A に B を教える」,
show A B = 「A に B を見せる・示す」,	send A B = 「A に B を送る」,
find A B = 「A に B を見つけてやる」,	make A B = 「A に B を作ってやる」,
buy A B = 「A に B を買ってやる」,	bring A B = 「A に B を持って来る」,
allow A B = 「A に B を与える」,	deny A B = 「A に B を与えない」など。

なお、S + V + O + O の第 4 文型を、[動詞 + 直接目的語 + 前置詞 + 間接目的語] の形にして、S + V + O の第 3 文型で書き表すことができる。その場合、前置詞に注意のこと。

(1) to を用いる動詞 = give, tell, teach, show, send, bring, allow など

(2) for を用いる動詞 = find, make, buy など

(2) of を用いる動詞 = ask

(例) He gave me this watch. = He gave this watch to me.

He bought me a dictionary. = He bought a dictionary for me.

He asked me a question. = He asked a question of me.

[5] 第 5 文型 : S + V + O + C

I found the book very interesting. (形容詞が補語)
 S V O C

We elected him chairman. (名詞が補語)
 S V O C

I found the door broken. (過去分詞が補語)
 S V O C

I saw him walking along the street. (現在分詞が補語)

S V O C

He made us clean the room. (動詞原形が補語)

S V O C

第5文型で用いられる主な動詞をあげておこう。

make A B=「AをBにする」,	find A B=「AがBだとわかる・思う」,
think A B=「AがBだと思う」,	elect A B=「AをBに選出する」,
appoint A B=「AをBに任命する」,	keep A B=「AをBにしておく」,
leave A B=「AをBのままにしておく」	

なお、特に次のものに注意。

see, hear, feel + 目的語 + 現在分詞 = 「～が一しているのを見る・聞く・感じる」

see, hear, feel + 目的語 + 過去分詞 = 「～が一されるのを見る・聞く・感じる」

see, hear, feel + 目的語 + 動詞原形 = 「～が一するのを見る・聞く・感じる」

make + 目的語 + 動詞原形 = 「～に一させる」

これらの知覚動詞、使役動詞においては、目的語の後に来る部分は補語となる。

(例) We saw him swimming in the pool. (現在分詞が補語)

S V O C

「我々は彼がプールで泳いでいるのを見た。」

I heard my name called. (過去分詞が補語)

S V O C

「私は自分の名前が呼ばれるのを聞いた。」

I heard someone cry for help. (動詞原形が補語)

S V O C

「私はだれかが助けを求めて叫ぶのを聞いた。」

He made me sign the paper against my will.

S V O C

「彼は私の意に反してその書類に署名させた。」

第2課 時 制

(1) 完了時制のまとめ

ここではまず、現在完了・過去完了・未来完了の3つの完了時制の確認をしよう。

[A] 現在完了

1. 現在までの動作の完了

「もう～してしまった、もう～し終えている、今～したところだ」

The bus has just started.

=「バスは今出たところだ。」

2. 過去の動作の現在における結果

「～して今は一だ、～した結果、今一だ、～してしまった」

My father has gone to England.

=「父はイギリスに行ってしまった。(その結果今ここにはいない。)」

3. 現在までの経験

「今までに～したことがある」

Have you ever been to New York?

=「今までにニューヨークに行ったことがありますか。」

4. 現在までの動作・状態の継続

「今までずっと～である、ずっと～している、ずっと～し続けている」

I have been ill in bed since yesterday.

=「私は昨日からずっと病気で寝ている。」

I have been studying since last night.

=「私は昨夜からずっと勉強し続けている。」

上の例文のように、その動詞が進行形にできる動詞である時には、継続を表す時には、現在完了進行形(=have been ~ing)を用いる。

[B] 過去完了

1. 過去のある時点までの動作の完了・結果

「(その時までには) もう～してしまっていた」

Day had already broken when we reached the top of Mt.Fuji.

＝「我々が富士山の頂上に着いた時には、もう夜が明けていた。」

2. 過去のある時点までの経験

「(その時まで)に～したことがあった」

He had never fallen ill until then.

＝「彼はその時まで病気をしたことがなかった。」

3. 過去のある時点までの動作・状態の継続

「(その時点まで)ずっと～であった, ずっと～していた」

He had been ambassador to Italy for five years until he came back to Japan.

＝「彼は日本に帰って来るまで, 5年間駐イタリア大使であった。」

The house had been burning nearly twenty minutes when the fire engine came.

＝「消防自動車 came 来た時には, その家は20分近く燃えていた。」

この継続の場合には, 下の例文のように, 進行形にできる動詞の時には, 過去完了進行形(＝had been ～ing)を用いる。

4. 大過去: 「過去のある出来事よりも更に以前の出来事を表す」

「(その時よりももっと以前に)～した」

He gave me the magazine which he had read.

＝「彼は読んだ本を私にくれた。」

この場合, 「彼が読んだ」のは「私にくれた」という過去の時よりももっと以前のことである。そこで, 過去完了が用いられる。

cf. **He read a magazine, and gave it to me.**

この場合も, 「読んだ」という方が, 「私にくれた」のよりもっと以前のことであるが, このように時間的な順序に従って表す時には, 過去完了を用いなくてよい。

[C] 未来完了

1. ある未来の時点までの動作の完了・結果

「(その時までには)～してしまっているだろう, ～し終えているだろう」

I will have finished my homework by seven o'clock this evening.

＝「私は今夜7時までには, 宿題をやり終えているだろう。」

2. 未来のある時点までの経験

「(その時までには) ~したことになる」

If he enters the speech contest again, he **will have entered** it three times.

=「もしもその弁論大会にもう一度参加すると、彼は3回参加したことになる。」

3. 未来のある時点までの動作・状態の継続

「(その時まで) ずっと~であるだろう、ずっと~しているだろう」

We **will have had** rainy weather for five days tomorrow.

=「明日で5日間雨天が続いていることになる。」

We **will have been** studying English for five years next year.

=「我々は来年で5年間英語を勉強していることになる。」

この継続の場合には、上の例文のように、進行形にできる動詞の時には、未来完了進行形 (=will have been ~ing) を用いる。

(2) 注意すべき時制の扱い

1. 時制の一致による [would + 動詞原形]

Helen said that she would leave for Paris the next day.

=「ヘレンは、次の日にパリに出発すると言っていた。」

ここで注意すべきは、「ヘレンがパリに出発する」ということは過去のことであるが、「ヘレンがそのように言った過去の時には、まだパリに出発していなかった」、言い換えると、「ヘレンがそのように言った過去の時から見ると、パリに出発するというのは未来のこと」だということである。このような場合には、その動詞を、[would + 動詞原形] で表す。

以下にもう一つ例文を添えよう。

Tom **believed** that he would succeed in the attempt.

=「トムは、自分がその試みに成功すると信じていた。」

この場合にも、「信じていたという過去の時には、まだ成功していなかった」、言い換えると、「信じていたという過去の時から見ると、成功するというのは未来のこと」なのである。そこで、[would succeed] となる。

2. 副詞節か名詞節かによる時制の扱いの違い

まず基本事項の確認のために、次の例文を出そう。

I **will finish** my homework before he comes back.

＝「彼が帰って来る前に、私は宿題を終えるだろう。」

ここで注意すべきは、「彼が帰って来る」というのは「未来のこと」だということである。しかしながら、それが「未来のこと」であるにもかかわらず、英文中では、[comes]と現在形で表されている。それは、beforeによって導かれる節が、時を表す副詞節だからである。このように、before, after, until, till, as soon as, by the timeなどの接続詞（句）によって導かれる、時・条件を表す副詞節中では、それが未来のことであっても、未来時制を用いずに、現在時制を用いるのである。以下にもう一つ例文を添えよう。

She will call you up as soon as she gets there.

＝「彼女はそこに着いたらすぐに、あなたに電話をかけて来るだろう。」

ここでも、「そこに着く」のは「未来のこと」であるが、as soon asに導かれる、時を表す副詞節中であるので、getsと現在形が用いられている。

さて以上のように、その基本を確認したら、次の発展に移ろう。そこで、まず次の英文に注目してもらいたい。

1. I will give this message to John when he comes.
2. Do you know when she will come back?
3. If it is fine, we will go on a picnic tomorrow.
4. Nobody knows if she will take part in the contest.

それぞれの英文中の when, if の後に来る英文の内容は未来のことである。1, 2では、同じ when の後に続く未来のことを表す英文が、1では現在形で、2では未来形で表されている。また、3, 4では、同じ if の後に続く未来のことを表す英文が、3では現在形で、4では未来形で表されている。それは1, 3では when, if に導かれる節が、時・条件を表す副詞節であり、2, 4では when, if に導かれる節が名詞節だからである。この点は、その訳を手掛かりにして、次のように覚えておこう。

A. 同じ when でも、

「～時に」と訳される時には、時を表す副詞節であるので、未来時制を使うことはできず、現在時制を用いる。

「いつ～か」と訳される時には、名詞節であるので、未来時制を使うことができる。

B. 同じ if でも、

「もしも～ならば」と訳される時には、条件を表す副詞節であるので、未来時制

を使うことはできず、現在時制を用いる。

「～かどうか」と訳される時には、名詞節であるので、未来時制を使うことができる。

さて、以上の点を和訳で確認してみよう。

1. 「ジョンが来た時に、この伝言を渡しておきましょう。」(副詞節)
2. 「彼女がいつ戻って来るか、あなたは御存知ですか。」(名詞節)
3. 「もしもお天気がよかったならば、我々は明日ピクニックに行きます。」(副詞節)
4. 「彼女がコンテストに参加するかどうか、だれも知らない。」(名詞節)

第3回 態

(1) 受動態の書き換えに際しての時制の扱い

受動態に書き換えるに際して、[be+過去分詞]の部分をどのように書き表すかは、重要なポイントである。そこで、まずその点の確認から始めよう。

次の各文を受動態に書き換えてみよう。

1. They will build a new library near the station.
2. They are building a new library near the station.
3. They were building a new library near the station.
4. They have built a new library near the station.

問題文の時制に応じて、受動態の [be+過去分詞] の部分は次のようになる。

1. [助動詞+動詞原形] ⇒ [その助動詞+be+過去分詞]
2. [現在進行形] ⇒ [am, are, is+being+過去分詞]
3. [過去進行形] ⇒ [was, were+being+過去分詞]
4. [現在完了] ⇒ [have, has+been+過去分詞]

そこで、1～4の各文を受動態に書き換えると、次のようになる。

1. A new library will be built near the station.
2. A new library is being built near the station.
3. A new library was being built near the station.
4. A new library has been built near the station.

(2) 受動態の書き換えの基本

次の各文を受動態に書き換えてみよう。

1. He wrote the letter in his room the day before yesterday.
2. He will give me a new book.
3. People call my brother Jimmy.

以下にそのポイントと答えを示そう。

1. [S+V+O] の第3文型の場合には、その目的語を主語にして作る。

The letter **was written** by him in his room the day before yesterday.

なお、このように、能動態の文の主語 (= 行為者) を残す場合には、場所や時間を

示す副詞(句)の前に置かれることに注意。

2. [S + V + O + O] の第4文型の場合には、その一方の目的語を主語にし、もう一方の目的語は過去分詞の後に置く。

I was given a new book by him. (間接目的語を主語)

A new book was given me by him. (直接目的語を主語)

3. [S + V + O + C] の第5文型の場合には、その目的語を主語にし、補語は過去分詞の後に置く。

My brother is called Jimmy.

なお、このように、能動態の文の主語(=行為者)が, people, we, they のように、不特定多数の人々である時、または, someone, somebody のように特定できない時には、その行為者を、[by ~] の形で残さないのが普通である。

(3) 注意すべき受動態

ここでは、入試で特によく取り上げられる受動態をまとめよう。

次の各文を受動態に書き換えてみよう。

- イ. Mr.Green made us clean the room.
ロ. We have never seen him get angry.
ハ. The boys were laughing at the girl.
ニ. All the people in this town look up to him.
ホ. Please open the box at once.

以下にそのポイントと答えを示そう。

1. [make + A + 動詞原形 = A に ~ させる] の、使役動詞の場合

= [A + be + made + to + 動詞原形]

この場合には、「~に」に当たる目的語を主語にし、[be + made] の後に、問題文では原形で与えられている動詞を、[to + 原形] の形で置く。

イ. We were made to clean the room by Mr.Green.

2. [see, hear, feel + A + 動詞原形 = A が ~ するのを見る・聞く・感じる] の、知覚動詞の場合

= [A + be + seen, heard, felt + to + 動詞原形]

この場合には、「~が」に当たる目的語を主語にし、[be + seen, heard, felt] の後

に、問題文では原形で与えられている動詞を、[to+原形] の形で置く。

ロ. He has never been seen to get angry.

問題文が現在完了であること、問題文の主語(=行為者)が、不特定多数の人々を表す we であるので、[by ~] がないことにも注意。

3. 動詞句の場合

次のような、[動詞+その他の語(句)] から成る動詞句の場合には、注意が必要である。

laugh at ~ = 「~を笑う」、look up to ~ = 「~を尊敬する」、look down upon (on) ~ = 「~を軽べつする」、do away with ~ = 「~を廃止する」、speak to ~ = 「~に話しかける」、send for ~ = 「~を呼びに人をやる」

これらの動詞句の場合には、動詞の後に続くその他の語(句)をそのまま過去分詞の後に置く。さらに、能動態の文の主語(=行為者)を表す時には、[by ~] とする。結果的に前置詞が2つ並ぶために、この by を省いてしまう間違いをよく見受けるが、省かないよう注意すること。

ハ. The girl was being laughed at by the boys.

ニ. He is looked up to by all the people in this town.

4. 命令文の場合

[let+目的語+be+過去分詞] の形にする。

ホ. Please let the box be opened.

この場合、目的語に続く be は、いつでも原形であることに注意。また、行為者を表す [by ~] は不要である。

(4) 注意すべき [be+過去分詞+前置詞]

be covered with ~	= 「~で覆われている」
be known to ~	= 「~によって(~に対して)知られている」
be known as ~	= 「~であるのを(~という名で)知られている」
be known by ~	= 「~を見れば(をもとにして)一がわかる」
be satisfied with ~	= 「~に満足している」
be surprised at ~	= 「~に驚く」
be interested in ~	= 「~に関心がある」

be convinced of ～ = 「～を確信している」

be concerned with ～ = 「～に関係している, ～に関心がある」

be concerned about ～ = 「～について心配している」

The top of the mountain is covered with snow.

「頂上は雪で覆われている。」

He is known as a good pianist to all the people.

「彼はすべての人々によってピアノが上手であることを知られている。」

A man is known by the company he keeps.

「付き合っている仲間を見れば、その人がわかる。」

He is concerned with politics.

「彼は政治に関心がある。」

We are concerned about your health.

「我々はあなたの健康を心配している。」

第4課 不定詞

A. 不定詞の用法

不定詞には、名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法、独立用法の4つがある。以下にまとめてみよう。

(1) 名詞的用法：「～すること」—主語、目的語、補語として用いられる。

e.g. ① To teach is to believe.

＝「教えるということは、学ぶことだ。」

cf. It is impossible for him to finish the work in a day.

＝「彼がその仕事を一日でやり終えるのは不可能だ。」(主語)

② Mr. Brown promised us to take us to the museum.

＝「ブラウンさんは、我々をその博物館に連れて行くと約束した。」

(動詞 promise の直接目的語)

③ The best way is to do one thing at a time.

＝「最もよい方法は、一度に一つのことをすることだ。」(補語)

(2) 形容詞的用法：「～するべき、～するための、～することができる、～する」—前出の名詞を修飾する。

e.g. ① I have a lot of work to do at home today.

＝「今日は、家でするべき仕事がたくさんある。」

② Please give me something to write with.

「何か書く(ための)物を貸して下さい。」

③ Mr. Brown is the only man to rely on.

＝「ブラウンさんは、信頼することができる唯一の人だ。」

④ He has many good friends to help him.

＝「彼には、彼を助けてくれる多くのよい友人がいる。」

(3) 副詞的用法：

1. 目的：「～するために、～するように」

e.g. He works hard to pass the examination next year.

＝He works hard in order to pass the examination next year.

＝He works hard so as to pass the examination next year.

= 「彼は、来年試験に合格するように、一生懸命勉強している。」

2. 原因：「～して、～することができて」

e.g. ① She was surprised to see him come out of the room.

= 「彼女は、彼がその部屋から出て来るのを見て驚いた。」

② I am very glad to see you again.

= 「私は、またあなたにお会いすることができて、とても嬉しいです。」

3. 理由・根拠：「～するとは、～するなんて」

e.g. ① He was very clever to leave here early.

= 「ここを早く出発したとは、彼も抜け目ない男だ。」

② You are very kind to say so.

= 「そうおっしゃって下さるなんて、あなたのご親切な方だ。」

4. 結果：「一して、その結果～、一して～」一前から順に訳される。

その多くは決まった形で用いられるので、熟語のように覚えておこう。

e.g. ① She grew up to be a famous pianist.

= 「彼女は成長して、有名なピアニストになった。」

grow up to + 動詞原形 = 「大人になって～する、成長して～する」

② He lived to be eighty years old.

= 「彼は80歳まで生きた。」

live to be ~ years old = 「～歳まで生きる、長生きして～歳になる」

③ He awoke to find himself lying on the sofa.

= 「目を覚ますと、彼はソファーに横になっていた。」

awoke (up) to find ~ = 「目を覚ますと～だった」

④ He worked hard day after day, only to fail.

= 「彼は来る日も来る日も一生懸命努力したが、結局の所、失敗した」

—only to + 動詞原形 = 「一したが、結局の所～だった」

5. 条件：「もしも～ならば」

e.g. To hear him speak English, you would take him for an Englishman.

= 「彼が英語を話すのを聞いたら、あなたは彼のことをイギリス人と間違えるだろう。」

6. その法：次の慣用句も副詞用法である。

e.g. ① Tom was too busy to go there with us.

= 「トムはあまりに忙しすぎて、我々と一緒にそこに行くことができなかった。」

too ~ (for A) to + 動詞原形 = 「あまりに～なので、(Aは) ーできない」

② The problem was easy enough for her to solve.

= 「その問題は、彼女に解くことができる位簡単だった。」

~ enough (for A) to + 動詞原形

= 「(Aが) ーすることができる位~, 大変~なので (Aは) ーすることができる」

③ He worked so hard as to finish it in an hour.

= 「彼はとても熱心に仕事をしたので、それを一時間でやり終えた。」

so ~ as to + 動詞原形

= 「ーすることができる位~, 大変~なのでーすることができる」

(4) 独立方法：文の他の部分から比較的独立して用いられ、文全体を修飾する。

e.g. ① To tell the truth, I don't like him.

= 「実を言うと、私は彼が好きではない。」

② To make matters worse, it began to rain.

= 「さらに悪い事には、雨が降り始めた。」

③ To be frank with you, I don't like him at all.

= 「率直に言うと、私は彼のことが気に入っていない。」

④ Strange to say, the door opened of itself.

= 「おかしな話だが、ドアはひとりでに開いたのだ。」

B. [be + to — 不定詞]

[主語 + be + to + 動詞原形] の形は、「~は一することだ」、「~は一することになっている (予定)」、「~は一すべきだ (義務)」、「~は一することができる (可能)」、「~は一することになる・~は一する運命だ (運命)」という5通りの訳し方が考えられる。そのいずれであるかは、その内容から決めることになる。以下に例文を添えよう。

(1) His aim is to rise in the world.

= 「彼の目標は出世することだ。」

(2) I am to meet Mr. Green at six tonight.

= 「私は今夜6時にグリーンさんに会うことになっている。」(予定)

(3) You are to love your neighbors as you love yourself.

= 「あなたは、自分を愛するのと同じように、隣人を愛すべきだ。」(義務)

(4) Not a taxi was to be found in the street.

= 「その通りには、タクシーを一台も見つけることができなかった。」(可能)

(5) He left his town and was never to come back again.

= 「彼は町を去り、二度と再び戻って来ない運命であった。」(運命)

C. 注意すべき不定詞のポイント

次の各文を和訳してみよう。

(1) a. I want to see Mr. Green.

b. I want you to see Mr. Green.

(2) He asked me which book to read.

(3) a. It is impossible for us to live without water.

b. It was very careless of you to say such a thing.

(4) a. He seems to be very tired.

b. He seems to have been very tired.

(1) 次の違いに注意：

a. [want to + 動詞原形 = ～したいと思う]

b. [want + 目的語 + to + 動詞原形 = ーに～してもらいたいと思う]

そこで、aは、「私はグリーンさんに会いたいと思っている」となり、bは、「私はあなたにグリーンさんに会ってもらいたいと思っている」となる。

(2) [疑問詞 + to- 不定詞] の訳し方

[疑問詞 + to- 不定詞] を訳す時には、「～すべきか、～したらよいのか」となることに注意。そこでこの文は、「彼は私にどちらの本を読むべきかとたずねた」と訳される。ここで注意すべきは、この訳から明らかなように、この場合、「本を読む」のは「彼」だということである。つまり、この文は次の英文と同じ意味を表しているのである。

He asked me which book he should read. = He said to me, "Which book

should I read?"

この時に、「彼は私にどちらの本を読むかとたずねた」と訳してしまうと、「本を読む」のは「私」になってしまい、[He asked me which book I would read. = He said to me. "Which book will you read?"]の意味になってしまうのである。

(3) [to+動詞原形] と [to have+過去分詞]

不定詞には、aの[to be]のように、[to+動詞原形]の形と、bの[to have been]のように、[to have+過去分詞]の形の2つがある。後者は[完了不定詞]と呼ばれる。その違いを次のように覚えておこう。

a. to+動詞原形 = 「～である、～している、～する」：述語動詞と同時の時制を表す。つまり、述語動詞が現在形である時には現在形に、述語動詞が過去形である時には過去形に書き換えられる。

そこでaの文は、「彼は幸福であるように思われる」と訳される。It seems thatの構文で書き換えると、[to be]という[to+動詞原形]の不定詞は、述語動詞が seems と現在形であるので、現在形に書き換えられ、[It seems that he is very happy.]となる。

b. to have+過去分詞 = 「～であった、～していた、～した」：述語動詞よりも一時制前を表す。つまり、述語動詞が現在形である時には過去形または現在完了に、述語動詞が過去形である時には過去完了形に書き換えられる。

そこでbの文は、「彼は幸福であったように思われる」と訳される。It seems thatの構文で書き換えると、[to have been]という[to have+過去分詞]の不定詞は、述語動詞が seems と現在形であるので、過去形または現在完了に書き換えられ、[It seems that he was very happy.], または、[It seems that he has been very happy.]となる。

D. 不定詞の書き換え

(1) The box was too heavy for her to lift.

= The box was so heavy that she couldn't lift it.

= 「その箱はあまりに重かったので、彼女は持ち上げることができなかった。」

この場合、全体の主語の The box を指す代名詞の it が、[too ~ to —] 構文の場合には、不定詞 to lift の目的語として書き表されないが、[so ~ that —] 構文の場合

合には、that一節の couldn't lift の目的語として書き表されることに注意。

(2) The book was easy enough for me to read without a dictionary.

=The book was so easy that I could read it without a dictionary.

=「その本は、私が辞書なしで読むことができる位簡単だった。」

この場合も、全体の主語 The book を指す代名詞の it について、(1)と同じことが当てはまることに注意。

(3) Helen ran so fast as to catch the bus.

=Helen ran so fast that she could catch the bus.

=「ヘレンは大変速く走ったので、バスに間に合うことができた。」

(4) Tom worked very hard (in order) to succeed in business.

=Tom worked very hard so that she might•could succeed in business.

=「トムは、商売に成功するために、一生懸命働いた。」

「～するために、～するように」(目的) =so that+主語+may•can+動詞原形

なお、[so that] の前に来る主節が過去時制の時には、may, can は might, could になる。

(5) Tom seemed to be very rich.

=It seemed that Tom was very rich.

=「トムはとても裕福であるように思われた。」

(6) Jane seemed to have been anxious about it.

=It seemed that Jane had been anxious about it.

=「ジェーンはそれについて心配していたように思われた。」

◆(5), (6)については、C(3)を参照のこと。(5)の [to be] は、述語動詞が seemed と過去形であるので、was と過去形になっている。一方、(6)の [to have been] は、述語動詞が seemed と過去形であるので、had been と過去完了になっている。

第5課 動名詞

A. 動名詞の用法

(1) 主語・補語・動詞または前置詞の目的語として用いられる。

1. Knowing is one thing, and teaching is quite another.

「知っているということと教えるということとは、全く異なる。」(主語)

2. His hobby is collecting stamps.

∴ 「彼の趣味は切手を集めることだ。」(補語)

3. I remember seeing him somewhere.

「どこかで彼に会った記憶がある。」(動詞 remember の目的語)

4. John went away without saying a word.

「ジョンは一言も言わずに去って行った。」(前置詞 without の目的語)

(2) 名詞の前に置かれて用途を表す。

1. That is a sleeping coach.

「あれは寝台車だ。」— 「眠るために用いられる車両」

2. John went to the smoking room.

「ジョンは喫煙室に行った。」— 「たばこを吸うために用いられる部屋」

ただし、次の場合には形容詞の用法の現在分詞である。

3. Look at that sleeping baby.

「あの眠っている赤ちゃんをごらんください。」

4. The smoking man is Tom's father.

「たばこを吸っている男性はトムのお父さんだ。」

B. 目的語としての動名詞と不定詞

動詞の中には、例えば、decide や plan のように、その目的語として不定詞しか取らない動詞と、動名詞しか目的語に取らない動詞がある。以下に、具体例をあげよう。

(1) 目的語に不定詞しか取らない動詞—agree, decide, expect, hope, want, wish, desire, plan, pretend, promise, offer など。

(2) 目的語に動名詞しか取らない動詞—mind, enjoy, give up, avoid, admit, escape, finish, repent, deny など。

(3) 目的語に不定詞を取るか、動名詞を取るかで意味が変わる動詞

イ. try to + 動詞原形 = 「～しようと努力する, ～しようとする」
try + ～ing = 「試しに～してみる」

ロ. remember to + 動詞原形 = 「忘れずに～する」
remember + ～ing = 「～したのを覚えている」

ハ. forget to + 動詞原形 = 「～するのを忘れる, 忘れてしまって～しない」
forget + ～ing = 「～したのを忘れている, ～したのを覚えていない」

なお, 次のものにも注意のこと。

stop to + 動詞原形 = 「～するために立ち止まる, 立ち止まって～する」
stop + ～ing = 「～するのをやめる」

stop に続く不定詞は, 目的語となる名詞的用法ではなくて, 「～するために」という目的を表す副詞的用法の不定詞である。

(例) I tried to open the box, but I couldn't.

「私はその箱を開けようとしたが, できなかった。」

I tried opening the box, and found a book in it.

「私は試しにその箱を開けてみた。すると, 中には本が入っていた。」

Please remember to post this letter on your way.

「忘れずに途中でこの手紙をポストに入れて下さい。」

I remember visiting your house when I was a child.

「子供の時分にお宅におじゃましたのを覚えております。」

C. 動名詞を含む重要表現

1. It's no use persuading him to go there with us.

「彼に我々とそこに行くよう説得してもむだだ。」

It's no use + ～ing = It's no good + ～ing = 「～してもむだだ」

2. I don't feel like eating anything.

「何も食べる気がしない。」

feel like + ～ing = 「～したい気分だ」

3. My cat came near being run over by a car.

= My cat came close to being run over by a car.

=My cat had a narrow escape from being run over by a car.

「家の猫はもう少しのところで車にひかれる所だった。」

come near ~ing=come close to ~ing=have a narrow escape from ~ing

=「もう少しで~しそうになる, 危うく~しそうになる」

なお, この場合に, 「~されそうになる」という時には, [being+過去分詞] とする。

4. My brother is not used to speaking in public.

「兄は人前で話すのに慣れていない。」

be used to ~ing=「~するのに慣れている」

5. I'm looking forward to seeing you again.

「またお目にかかるのを楽しみにしております。」

look forward to ~ing=「~するのを楽しみに待つ」

6. Would you mind telling me the way to the station?

「駅に行く道を教えて下さいませんか。」

Would you mind ~ing=「~して下さいませんか」

この依頼に対して, 「ええ, いいですよ」と答える時には, [Not at all. Of course not. Certainly not.] など, 否定の答え方をすることに注意。

7. My mother is busy preparing dinner for guests.

「母はお客様方のお食事をご用意するので忙しい。」

be busy ~ing=「~するので忙しい, 慌ただしく~する」

8. Kyoto is worth visiting at least once.

「京都は少なくとも一度は訪ねてみる価値がある。」

be worth ~ing=「~する価値がある」

9. There is no knowing what may happen in the future.

=It is impossible to know what may happen in the future.

「将来何が起こるかを知ることは不可能だ。」

There is no ~ing=It is impossible to+動詞原形=「~することは不可能だ」

10. It goes without saying that health is above wealth.

=Needless to say, health is above wealth.

「言うまでもなく, 健康は富にまさる。」

It goes without saying that ~ = Needless to say, ~ = 「言うまでもなく~」

11. I make a point of taking a walk before breakfast.

= I make it a rule to take a walk before breakfast.

make a point of ~ing = make it a rule to + 動詞原形 = 「~することにしている」

12. The train was on the point of leaving.

= The train was about to leave.

「列車は今にも発車しようとしていた。」

be on the point of ~ing = be about to + 動詞原形 = 「今にも~しようとしている所だ」

13. Your watch needs mending at once.

= Your watch needs to be mended at once.

「君の時計はすぐに修理される必要がある。」

need + 原形 + ing = need to be + 過去分詞 = 「~される必要がある」

14. I can't help laughing at the strange sight.

= I cannot but laugh at the strange sight.

「私はその奇妙な光景を見て、笑わずにはいられない。」

cannot help ~ing = cannot but + 動詞原形 = 「~せずにはいられない」

15. How about going for a walk?

= What do you say to going for a walk?

「散歩に行きましょうよ。」

How about ~ing? = What do you say to ~ing? = 「~しましょう」

16. This is the sweater of her own knitting.

「これは彼女が自分で編んだセーターだ。」

of one's own ~ing = 「一が自分で~した」

17. I never (can't) see this picture without remembering my parents.

「私はこの写真を見るといつでも、両親のことを思い出す。」

never ~ without ~ing = can't ~ without ~ing = 「~するといつでも~」

18. My brother went to America for the purpose of studying chemistry.

= My brother went to America in order to study chemistry.

「兄は化学を研究するためにアメリカに行った。」

for the purpose of ~ing=with a view to ~ing=with the view of ~ing
=in order to+動詞原形=so as to+動詞原形=「~するために」(目的)

19. I didn't call on you for fear of disturbing you.

「ご迷惑をおかけしてはいけないと思い、お訪ねいたしませんでした。」

for fear of ~ing=「~しないように、~するといけないので」

20. On coming home, John turned on the radio.

「家に帰るとすぐにジョンはラジオをつけた。」

on ~ing=「するとすぐに」

21. Urgent business prevented me from going to the concert.

「急用のために、私はコンサートに行くことができなかった。」

A prevent B from ~ing

=「AはBが~するのを妨げる・予防する、AのためにBは~できない」

22. John insisted on my paying the money at once.

「ジョンは私がお金をすぐに支払うべきだと主張した。」

D. 動名詞の意味上の主語

次の2つの英文を比較しよう。

1. John is proud of being very good at tennis.

2. John is proud of her being very good at tennis.

この2つの英文の違いは、動名詞 being の前に her があるかないかである。1の場合には、「ジョンは、自分がテニスをするのが非常に上手であることを自慢している」となる。2の場合には、「ジョンは、彼女がテニスをするのが非常に上手であることを自慢している」となる。1の場合には、「テニスをするのが非常に上手である」のは、主語の John である。それに対して、2の場合には、「テニスをするのが非常に上手である」のは、her である。このように、その動名詞の意味上の主語が、文全体の主語と異なるために、それを明示することが必要な場合には、意味上の主語を、その動名詞の前に、所有格か目的格の形で置く。

E. [原形+ing] と [having+過去分詞] の動名詞の違い。

1. Mary is ashamed of knowing nothing about it.

2. Mary is ashamed of having known nothing about it at that time.

1の英文では、knowing という、動名詞の原形に -ing をつけた動名詞が、2の英文では、having known という、having+過去分詞の動名詞が用いられている。その違いを、次のように覚えておこう。

1. [原形+ing] = 述語動詞と同時：[～である、～している、～する]

そこで、述語動詞が現在形の時には現在形に、過去形の時には過去形に書き換えられる。

2. [having+過去分詞] = 述語動詞よりも一時制前：[～であった、～していた、～した]

そこで、述語動詞が現在形の時には過去形か現在完了に、過去形の時には過去完了に書き換えられる。

以上の2点を踏まえて和訳と書き換えを試みよう。

1. 「メアリーは、それについて何も知らないことを恥ずかしく思っている。」

= Mary is ashamed that she knows nothing about it.

[原形+ing] の knowing は、述語動詞が is と現在形であるので、現在形の knows に書き換えられる。

2. 「メアリーは、その時にそれについて何も知らなかったことを恥ずかしく思っている。」

= Mary is ashamed that she knew nothing about it.

[having+過去分詞] の having known は、述語動詞が is と現在形であるので、過去形の knew と書き換えられる。

この点をさらに以下の例文で補強しよう。

3. Tom was proud of being a good baseball player.

「トムは野球が上手であることを自慢に思っていた。」

= Tom was proud that he was a good baseball player.

[原形+ing] の being は、述語動詞が was と過去形であるので、過去形の was に書き換えられる。

4. Tom was proud of having been a good baseball player.

「トムは野球が上手であったのを自慢に思っていた。」

= Tom was proud that he had been a good baseball player.

[having+過去分詞] の having been は、述語動詞が was と過去形であるので、過去完了の had been に書き換えられる。

第6課 分詞

A. 分詞の用法

分詞のさまざまな用法を検討する前にまず、現在分詞と過去分詞の基本的な区別を確認しておこう。基本的に、現在分詞は「～する側」を表し、過去分詞は「～される側」を表す。以下にその例を示そう。

1. I know the boy reading a book over there.

「私はそこで本を読んでいる少年を知っている。」

2. My father bought a new camera made in Japan.

「父は日本で作られた新しいカメラを買った。」

後程改めて解説するが、1, 2は共に形容詞的用法の分詞である。1においては、現在分詞が修飾している the boy は、「本を読む側」、つまり、「read する側」である。そこで現在分詞が用いられている。それに対して2においては、過去分詞が修飾している a new camera は、「作られる側」、つまり、「make される側」である。そこで、過去分詞が用いられている。

さて、このように、分詞の基本的な区別を確認した後、分詞のさまざまな用法・ポイントを確認しよう。

(1) [be+現在分詞] で進行形を、[be+過去分詞] で受動態を作る。

1. John was playing tennis with Mary at that time.

「ジョンはその時メアリーとテニスをしていた。」

2. This book was written by Mr. Green in 1980.

「この本はグリーンさんによって1980年に書かれた。」

(2) [have+過去分詞] で完了形を作る。

1. I have never seen such a good movie as this.

「私は今までにこれ程よい映画を見たことがない。」(現在完了)

2. When I got to the station, the train had already left.

「私が駅に着いた時には、列車はもう出発してしまっていた。」(過去完了)

3. By the beginning of next month Mr. Smith will have been in the hospital for a month.

「来月の初めて、スミスさんは1か月入院していることになる。」(未来完了)

(3) 名詞を修飾する形容詞的用法。

1. Look at the sleeping baby.

「あの眠っている赤ちゃんをごらん下さい。」

2. Do you know the lady talking with Mr. Brown over there?

「あそこでブラウンさんと話している女性を御存知ですか。」

3. I received a message written in German this morning.

「私は今朝、ドイツ語で書かれた伝言を受け取った。」

このような形容詞的用法の分詞においては、現在分詞は「～する側」を表して、「～している、～する」と訳される。それに対して過去分詞は「～される側」を表して、「～される、～されている、～された、～されていた」と訳される。それぞれの文に当てはめると、1では、the baby が「眠る側」であるので現在分詞が、2では、the lady が「話す側」であるので現在分詞が、3では、a message が「書かれる側」であるので過去分詞が用いられている。

次に、形容詞的用法の分詞の位置も確認しておこう。分詞一語が名詞を修飾する時には、修飾される名詞の前に置かれる。それに対して、分詞に他の語句が加わる時には、修飾される名詞の後に置かれる。1では、sleeping 一語が修飾するので、baby の前に置かれて、[the sleeping baby] となっている。2では [talking with Mr. Brown over there] が、3では [written in German] がそれぞれ名詞を修飾するので、修飾される名詞の後に置かれて、[the lady talking with Mr. Brown over there], [a message written in German] となっている。

(4) 主格補語、目的格補語となる用法。

1. John sat watching television.

「ジョンはテレビを見ながらすわっていた。」(主格補語)

2. Mr. Smith sat surrounded by his children.

「スミスさんは子供達に囲まれてすわっていた。」(主格補語)

3. John kept me waiting so long.

「ジョンは私を長いこと待たせた。」(目的格補語)

4. I found the door broken.

「私はドアが壊されているのに気がついた。」(目的格補語)

1の文は、Johnが主語、satが動詞、watching televisionが補語となる。また、2の文も、Mr. Smithが主語、satが動詞、surrounded by his childrenが補語となる。つまり、それぞれ[S+V+C]の第2文型の英文である。それぞれの英文において、[watching television]、[surrounded by his children]の部分は主格補語となっている。

主格補語となる分詞とは、このように、sit, stand, go, comeなどの動詞と共に用いられて、現在分詞の場合には「～しながら、～して」という意味を、過去分詞の場合には「～されながら、～されて」という意味を表すものである。なお、これらの分詞は、付帯状況を表す分詞と考えることも可能である。

なお、1の文においては、主語のJohnが「テレビを見る側」であること、2の文においては、主語のMr. Smithが「子供達に囲まれる側」であることにも注意。

3の文は、Johnが主語、keptが動詞、meが目的語、waitingが補語となる。4の文も、Iが主語、foundが動詞、the doorが目的語、brokenが補語となる。つまり、それぞれ[S+V+O+C]の第5文型の英文である。それぞれの英文において、[waiting]、[broken]は目的格補語となっている。

なお、3の文においては、目的語のmeが「待つ側」であること、4の文においては、目的語のthe doorが「壊される側」であることにも注意。

(5) 使役・受動の have, get の目的格補語となる過去分詞。

1. You had better have your watch repaired.

「あなたは時計を修理してもらう方がいいですよ。」

2. I had my camera stolen in the train.

「私は列車の中でカメラを盗まれた。」

3. I got my room cleaned by my sister.

「私は妹に部屋を掃除してもらった。」

以上の英文は、[S+V+O+C]の第5文型である。1では、Youが主語、had better haveが動詞、your watchが目的語、repairedが補語である。2では、Iが主語、hadが動詞、my cameraが目的語、stolenが補語である。3では、Iが主語、gotが動詞、my roomが目的語、cleanedが補語である。それぞれの目的語を検討

すると、1の your watch は「修理される側」、2の my camera は「盗まれる側」、3の my room は「掃除される側」であることがわかる。そこで、それぞれ補語として過去分詞が用いられているのである。

では、その目的語が「～する側」である時にはどうなるのか。そこで、以下の例文に注目しよう。

4. I had my sister turn on television.

「私は妹にテレビをつけてもらった。」

5. I got my mother to wash my shirt.

「私は母にシャツを洗濯してもらった。」

4の文において、目的語の my sister は「テレビをつける側」である。また、5の文において、目的語の my mother は「洗濯する側」である。その目的語が「～する側」である場合には、その補語として、haveの時には動詞原形を取り、getの時には to+動詞原形を取る。

以上の点を改めて次のようにまとめておこう。

イ. 目的語が「～される側」の時

have+目的語+過去分詞/get+目的語+過去分詞

= 「～を一してもらう、～を一される」

ロ. 目的語が「～する側」の時

have+目的語+動詞原形/get+目的語+to+動詞原形

= 「～に一してもらう、～に一させる」

(6) 付帯状況を表す with と共に用いる用法。

1. Mary stood with her hair flying in the wind.

「メアリーは髪を風になびかせて立っていた。」

2. Tom sat in an armchair with his eyes closed.

「トムは目を閉じて椅子にすわっていた。」

このように、[with+目的語+現在分詞]、[with+目的語+過去分詞]の形で、「～が一している状態で」、「～が一された状態で」、「～を一して」という意味を表す。この場合も、withの目的語が、「～する側」か「～される側」かで、現在分詞と過去分詞の区別が決まるのであるが、注意しなければならないのは、

「～を一して」という日本語だけを手掛かりに考えると、現在分詞を用いるべき時にも、過去分詞を用いてしまう危険性があるということである。1の「髪を風になびかせて」という日本語だけを手掛かりにすると、「髪」は「なびかされる側」になってしまい、過去分詞を用いてしまいかねない。1の場合には、flyには「なびく」という意味はあっても、「なびかせる」という意味はないのだから、「髪」は「なびく側」と考えるべきであり、そのように考えると、現在分詞のflyingを用いることがわかる。また、2の場合には、「目」は「閉じられる側」であるので、過去分詞のclosedを用いる。

B. 分詞構文

(1) 分詞構文の意味

分詞構文とは基本的に、[接続詞＋主語＋動詞]の代わりに用いられるものである。分詞構文は、原因・理由、条件、譲歩、時、付帯状況を表す。以下に例を示そう。

1. Having no money with me, I couldn't buy the book.

「お金を持ち合わせていなかったので、私はその本を買えなかった。」(原因・理由)

= As (Since・Because) I had no money with me, I couldn't buy the book.

2. Turning to the left, you will find the library.

「左に曲がるならば、図書館が見えますよ。」(条件)

= If you turn to the left, you will find the library.

3. Being very rich, Mr. Smith was not happy at all.

「たいそう裕福ではあったが、スミスさんは全く幸福などではなかった。」(譲歩)

= Though he was very rich, Mr. Smith was not happy at all.

4. Arriving at the station, I found the train just going.

「私が駅に到着した時、列車はちょうど発車するところだった。」(時)

= When I arrived at the station, I found the train just going.

5. Pointing to the door, Jane cried in a loud voice.

「ジェーンは、ドアを指さして大声で泣いた。」(付帯状況)

= Jane pointed to the door, and cried in a loud voice.

She sat alone in the room, crying all the while.

「彼女は、ずっと泣きながら、その部屋に1人でいた。」(付帯状況)

=She sat alone in the room, and cried all the while.

なお、下の例文の場合には、A-(4)において解説した、主格補語となる現在分詞と考えることも可能である。

(2) 分詞構文の注意すべきポイント

1. 独立分詞構文—分詞の前に意味上の主語が置かれるもの

Night coming on, we left for home.

「夜が来て、我々は家路についた。」

=When night came on, we left for home.

下の接続詞を用いて書き換えた英文に注目してもらいたい。When に始まる副詞節の主語は night, 主節の主語は we, すなわち、その2つの節の主語が異なっている。このように、分詞構文を用いて書き表される節の主語と、主文の主語とが異なる場合には、その分詞の前に意味上の主語を残しておく。このような、分詞の意味上の主語が主文の主語と異なるために、その意味上の主語が分詞の前に置かれたものを、独立分詞構文と呼ぶ。

2. 過去分詞による分詞構文—意味上の主語が「～される側」である時

Written in easy English, this book is suitable for beginners.

「やさしい英語で書かれているので、この本は初心者に向いている。」

=As (Since・Because) it is written in easy English, this book is suitable for beginners.

この場合には、分詞構文の意味上の主語となる this book は「書かれる側」である。このように、分詞構文の意味上の主語が「～される側」である時には、過去分詞を用いて分詞構文を作る。この場合には、その過去分詞の前に being, または、having been が省略されていると考えるとよい。

3. 分詞構文における、[原形+ing] と [having+過去分詞] の区別

Living in Tokyo, I have few friends in the country.

「東京に住んでいるので、私は田舎にはほとんど友人がいない。」

=As I live in Tokyo, I have few friends in Tokyo.

Having lived in Tokyo when I was young, I have some friends there.

「若い頃東京に住んでいたので、私はそこに友人が何人かいる。」

=As I lived in Tokyo when I was young, I have some friends there.

上の英文の living のような、動詞原形に—ing をつけた分詞は、主文の述語動詞と同時を表し、下の英文の having lived のような、[having+過去分詞] は、主文の述語動詞よりも一時制前を表す。次のように覚えておくとよい。

イ. 原形+ing：主文の述語動詞が、現在形の時には現在形、過去形の時には過去形にする。

ロ. having+過去分詞：主文の述語動詞が、現在形の時には過去形か現在完了、過去形の時には過去完了にする。

主文の述語動詞がどちらも have と現在形であるので、上の英文の living は現在形の live となり、下の英文の having lived は過去形の lived となっている。

この点をさらに次の例文で確認してみよう。

Living in Tokyo, I had few friends in the country.

=As I lived in Tokyo, I had few friends in the country.

Having lived in Tokyo some years before, I had some friends there.

=As I had lived in Tokyo some years before, I had some friends there.

主文の述語動詞はそれぞれ had と過去形である。そこで、上の英文の living は過去形の lived となり、下の英文の having lived は過去完了の had lived となっている。

C. 注意すべき現在分詞と過去分詞の区別

(1) 自動詞の場合

次の2つの英文の違いを比較してみよう。

1. Look at that falling tree.

2. Look at that fallen tree.

下線部はそれぞれ形容詞的用法の分詞で、後に続く tree を修飾している。fall という動詞は、「落ちる、落下する、倒れる」という意味を表す自動詞である。自動詞の場合の現在分詞と過去分詞の区別には注意が必要である。

自動詞の場合には、現在分詞は、「進行・予定」を表して、「～している、～している最中の、～しかかっている、～することになっている」という意味になる。それに

対して、過去分詞は、「完了」を表して、「～してしまった、～した」という意味になる。以上の点を踏まえて上の英文を和訳すると、1は、「あの倒れかかっている木を見てごらん。」となり、2は、「あの倒れてしまった木を見てごらん。」となる。

このような区別が重要になるものとして、次のものをあげておこう。

retiring=「退職することになっている」—retired=「(もう)退職した、退職してしまった」

(2) 元来が、「～させる」という意味を持つ動詞の場合

次の英文の()内の語を、適当な分詞に変えてみよう。

1. The news was so (excite) that we got (excite).

2. I felt (disappoint) to hear the news of his failure.

まずここで注意すべきは、excite, disappoint という動詞の基本の意味である。exciteは「興奮させる」、disappointは「失望させる」という意味である。このように、元来が「～させる」という意味を持つ動詞の場合には、現在分詞は「～させる側」を表し、過去分詞は「～させられる側」、すなわち、「～する側」を表す。

この点を踏まえて上の英文にもう一度目を向けよう。1の文では、主語のThe newsは「我々を興奮させる側」であり、that-節中の主語weは「そのニュースに興奮する側」である。そこで、[The news was so exciting that we got excited.]とする。また、2の文では、主語のIは「彼が失敗したという知らせを聞いて失望する側」である。そこで、[I felt disappointed to hear the news of his failure.]とする。

このポイントが当てはまる動詞として、他に、[satisfy=満足させる]、[please, delight=喜ばせる]、[bore=退屈させる・うんざりさせる]、[surprise=びっくりさせる]、[interest=興味を持たせる]をあげておこう。

なお、厳密に言うと、この場合の-ingは、現在分詞ではなくて形容詞であるが、この重要なポイントを解説するための便宜として、現在分詞として扱ったことを断っておく。

D. 分詞を含む重要熟語

1. Talking of golf, do you play golf?

「ゴルフと言えば、ゴルフはおやりになるのですか。」

2. Generally speaking, men are stronger than women.

「一般的に言って、男性は女性よりも力が強い。」

3. Strictly speaking, this is false.

「厳密に言えば、これは間違いだ。」

4. Taking all things into consideration, I am not equal to the task.

「あらゆる事を考慮に入れると、私にはその仕事をする能力がない。」

5. Judging from his accent, he must be an American.

「彼のアクセントから判断すると、彼はアメリカ人に違いない。」

6. I'm sorry I can't make myself understood in German.

「残念ながら、私はドイツ語はだめなんです。」

can make oneself understood in ~語 = 「~語で話を通じる、~語で用が足りる」

7. The speaker couldn't make himself heard.

「その話している人は、自分の声が他の人に聞こえるようにすることができなかった。」

can make oneself heard = 「自分の言っていることが（他の人に）聞こえるようにする」

第7課 関係詞

(1) 入試頻出重要関係詞—熟語を中心として

入試英語では、関係詞を含む熟語・慣用表現がよく出題される。それらを中心に、入試頻出の主なものをまとめてみよう。

1. 関係代名詞の **that** を用いなければならない場合

次の場合には、関係代名詞は **that** を用いなければならない。

a. 先行詞に次のものが付く時

- | | |
|---------------|----------------------------|
| the + 形容詞の最上級 | = 「最も～な」 |
| the first | = 「最初の～」 |
| the last | = 「最後の～」 |
| the + 序数 | = 「一番目の～」 |
| all the | = 「すべての～」 |
| the very | = 「まさにその～」この very は形容詞である。 |

b. 先行詞が [人+物] である時

e.g. **That is the best movie that I have ever seen.**

「それは私が今までに見た内で、最もよい映画だ。」

This is the very book that I have wanted to read.

「これは、私が読みたいと思っていたまさにその本だ。」

= 「これこそまさに、私が読みたいと思っていた本だ。」

Look at the boy and the dog that are lying on the grass.

「芝生に寝そべっている少年と犬を見てごらん。」

(先行詞が, **the boy and the dog** と, 人+物である。)

2. **what** を含むもの

a. **His father is what we call a walking dictionary.**

「彼の父親はいわゆる生き字引きだ。」

what we call ~ = **what they call** ~ = **what is called** ~ = 「いわゆる～」

b. **It began to rain and, what was worse, I had no umbrella with me.**

「雨が降り出した。更に悪い事には、かさを持ち合わせていなかった。」

what[is・was] + 比較級 = 「さらに～なことには」

- c. John is quite different from **what he used to be**.

「ジョンは昔の彼とは全く異なる。」

what ~ used to be = 「昔の~, ~の昔の姿」

- d. Mike is not **what he was two years ago**.

「マイクは2年前の彼とは違う。」

what ~ [was·were]—ago = 「一前の~, ~の一前の姿」

- e. My parents have made me **what I am (today)**.

「両親が私を、今日の私にした。」

= 「私が今日あるのも両親のおかげだ。」

what ~ [am·are·is] (+today) = 「今日の~, ~の今日の姿」

- f. He gave me **what little money he had with him**.

「彼は、持っていたすべての、わずかばかりのお金を私にくれた。」

= 「彼は、わずかではあったが、持っていたすべてのお金を私にくれた。」

この **what** は関係形容詞で、「すべての」という意味を表す。

what A + ~ = 「~なすべてのA」

3. **as** を含むもの

- a. Read **such books as will do you good**.

「あなたのためになるような本をお読みなさい。」

このように、先行詞に **such** が付く時には、関係代名詞は **as** を用いる。

such A as ~ = 「~のようなA」

- b. **As is often the case with him**, he was late for class this morning.

「彼にはよくあることだが、彼は今朝授業に遅刻した。」

as is often the case (with ~) = 「(~には) よくあることだが」

- c. **As might be expected of a gentleman**, he never breaks his promise.

「さすがに紳士だけのことはあって、彼は決して約束を破らない。」

as might be expected of ~ = 「さすがに~だけのことはあって」

4. **but** を含むもの

There is no mother **but** loves her children.

この **but** は、関係代名詞であり、その後続く形容詞節を否定にする。さらに、この関係代名詞の **but** を用いる時には、必ずその前に否定語が登場していなければ

ならない。その点を踏まえてこの英文を訳すと、次のようになる。「自分の子供を愛さない母親はいない。」

これについては、その基本を次のように覚えておこう。

There is no ~ but — = 「～でない～は (い) ない、どんな～でも一だ」

その発展を以下の例文で示そう。

There are few children but like watching television.

「テレビを見るのが好きでない子供はほとんどいない。」

ここでは、その前に、「ほとんど～ない」という否定を表す **few** が置かれている。また、**few** の後には複数名詞が来るので、**There are few children** となっている。

(2) 入試頻出の関係詞補充問題のポイント

次の各文中の空所に適当な関係詞を補ってみよう。

1. We are going to visit the village () he was born fifty years ago.
2. The museum () I used to visit when I was a boy will be destroyed next month.
3. The man () I believed was honest deceived me.
4. John didn't apologize to his father, () made him angry.
5. Please give this book to () wants to read it.

= 「それを読みたがる人はだれにも、この本を差し上げなさい。」

以下にそのポイントと答えを示そう。

1. 2 について：

この問題では、その先行詞が、**the village, the museum** と場所を表す語である。このように、先行詞が場所を表す名詞だからといって、短絡的に **where** を補ってはいけない。

先行詞が場所を表す語である時には、

- (1) まずその関係詞節 (= 先に訳して、前に来る名詞に戻る部分) を抜き出し、
- (2) その関係詞節中の適当な位置に、() + 先行詞を補い、
- (3) その () 内に、前置詞が必要かどうかを調べる。
- (4) その時に、前置詞が、

イ.. 必要である時には、関係副詞 = **where** を補う。

ロ. 不要である時には、関係代名詞=**which**を補う。

これを上の2つの問題文にあてはめてみよう。

1. まず翻訳を試みると、「我々は、彼が50年前に生まれた村を訪れる予定だ」となる。つまり、[he was born fifty years ago]の部分を先に訳して、先行詞のthe villageに戻ることになる。ということは、[he was born fifty years ago]の部分が関係詞節である。

その関係詞節中の適当な位置に、() + 先行詞を補うと、次のようになる。

he was born () the village fifty years ago.

その空所に前置詞が必要かどうかを調べると、inが必要になる。前置詞が必要であるので、1では、関係副詞の**where**を補うことになる。

2. まず翻訳を試みると、「少年のころ、私がよく訪れた博物館は来月取り壊される」となる。つまり、[I used to visit when I was a boy]の部分を先に訳して、先行詞のthe museumに戻るようになる。ということは、[I used to visit when I was a boy]の部分が関係詞節である。

その関係詞節中の適当な位置に、() + 先行詞を補うと、次のようになる。

I used to visit () the museum when I was a boy.

その空所に前置詞が必要かどうかを調べると、visitが他動詞であること、つまり、「～を訪ねる、～を訪れる」という時には、その後に前置詞を付けずに目的語を続けることから、前置詞が不要であることがわかる。そこで、2では関係代名詞の**which**を補うことになる。

3について：

ここでは、先行詞が人であり、空所の後に[主語+動詞]が来ているからといって、関係代名詞の**whom**を補ってはいけない。

このように、先行詞が人で、空所の後が[主語+動詞]である問題が入試で出題されたら

- (1) その文を翻訳して、その関係詞節を抜き出し、
- (2) その関係詞節中の適当な位置にその先行詞を補い、
- (3) その先行詞を代名詞に変えてみる。
- (4) その時に、

イ. 主格の代名詞になる時には、**who**を補う。

ロ. 目的格の代名詞になる時には, **whom** を補う。

この問題にあてはめてみよう。

まず翻訳を試みると、「正直であると私が信じていた人が、私をだました」となる。
つまり、

[I believed was honest] の部分を先に訳して、先行詞の the man に戻る。ということ
とは

[I believed was honest] の部分が関係詞節である。

つぎに、その関係詞節中の適当な位置に先行詞を補うと、was honest の主語となる
ので、次の位置に置かれる。

I believed the man was honest.

= 「その男が正直だと、私は信じていた。」

その先行詞を代名詞に置き換えると、上に述べたように、was の主語となるので、
主格の代名詞 he になる。そこで、主格の代名詞になる時には **who** を補うという決ま
りに従って、who が補われる。

4 について：

4 においても、先行詞が人で、空所の後に動詞が来るからと短絡的に考えて、who を
補ってはいけない。

このように、空所の前にコンマのある、非制限（継続）用法の時には、

- (1) そのコンマの前後をそれぞれ翻訳し、
- (2) その間に次の内のいずれかを補うことができるかどうかを調べる。

イ. 「その事 (は, が, を, に)」

ロ. 「その時 (に, には)」

ハ. 「その場所 (で, に, へ)」

- (3) その時に、

イ. 「その事 (は, が, を, に)」を補うことができる時には、**which** を、

ロ. 「その時 (に, には)」を補うことができる時には、**when** を、

ハ. 「その場所 (で, に, へ)」を補うことができる時には、**where** をそれぞれ補う。

4 の問題文についてあてはめてみよう。

コンマの前後を翻訳すると、「ジョンは父親に謝らなかった。() 彼を怒らせた。」
となる。

次に、その空所に、イ、ロ、ハのいずれかを補うことができるかどうか調べると、「その事は」を補うことができる。そこで、**which** が補われることになる。

5について：

ヒントとして、「人はだれにでも」と日本語が与えられている。その日本語から、**whoever** か **whomever** が補われることに気がつくだろう。その時に、その前に前置詞の **to** があるからといって、短絡的に **whomever** を補ってはいけない。

whoever と **whomever** の使い分けについては、その空所の後に来るものを手掛かりにするとよい。そのポイントを次のように覚えておこう。

イ. その空所の後に来るのが動詞の時には、**whoever** を

ロ. その空所の後に来るのが〔主語＋動詞〕の時には、**whomever** をそれぞれ補う。

問題文中では、その空所の後に、**wants** と動詞が来ているので、**whoever** が補われることになる。

第8課 仮定法

A. if を用いる仮定法——事実の反対を述べる。

まず、次の3つの和文に注目しよう。

- (1) 「もしも十分なお金を持っていたならば、私はその本を買うことができるのに。」
- (2) 「もしも私がそこにいたならば、私は君を助けてあげたのに。」
- (3) 「もしもあの時に私の忠告に従っていたならば、君は今ごろは幸せであるだろうに。」

ここでまず注目すべき事は、どれも事実ではないということである。つまり、(1)の場合には、「実際には十分なお金を持っていないので、その本を買うことができない」のである。また、(2)の場合には、「実際にはそこにいなかったたので、君を助けなかった」のである。さらに、(3)の場合には、「実際にはあの時に私の忠告に従わなかったたので、君は今幸せではない」のである。

次に注目すべき事は、(1)は現在の事実の反対を述べているということ、つまり、「もしも今～だったならば、一するのに」と言っていること、(2)は過去の事実の反対を述べているということ、つまり、「もしも過去のあの時に～だったならば、一したのに」と言っていることである。また(3)は、「もしも～ならば」という条件節は過去の事実の反対を述べ、帰結節は「今～なのに」と現在の事実の反対を述べていること、つまり、「もしも過去のあの時に～だったならば、今一するのに」と言っていることである。

次に英語の上でのポイントをまとめよう。

(1) 仮定法過去

(1)のように、「現在の事実の反対」を述べるものを、仮定法過去と呼ぶ。それを英語で言い表す時には、次の形を取る。

if 一 節 = 過去形

帰結節 = would, should, could, might + 動詞原形

これに従って(1)の文を英訳すると次のようになる。

If I had enough money with me, I could buy the book.

(2) 仮定法過去完了

(2)のように、「過去の事実の反対」を述べるものを、仮定法過去完了と呼ぶ。それを英語で言い表す時には、次の形を取る。

if 一節 = 過去完了

帰結節 = would, should, could, might + have + 過去分詞

これに従って(2)の文を英訳すると次のようになる。

If I had been there, I (should) have helped you.

(3) 混合仮定法

(3)のように、「もしも過去のあの時に～だったならば、今一なのに」と述べるものを、混合仮定法と呼ぶ。それを英語で言い表す時には、次の形を取る。

if 一節 = 過去完了

帰結節 = would, should, could, might + 動詞原形

これに従って(3)の文を英訳すると次のようになる。

If you had followed my advice, you would be happy now.

以上に加えて次の点を添えておく。

(イ) 仮定法で用いる be 動詞の過去形は、were とする。

(ロ) would, should, could, might の使い分け

「～できるのに・～できるだろう」 = could + 原形

「～できたのに・～できただろう」 = could + have + 過去分詞

「～するかもしれないのに」 = might + 原形

「～したかもしれないのに」 = might + have + 過去分詞

「～するのに・～するだろう」 = would + 原形

「～したのに・～しただろう」 = would + have + 過去分詞

なお、主語が I, we の時には、would の代わりに should を用いてもよい。

B. I wish 表現—事実とは反対の願望を表す。

次の英文の () 内の動詞を適当な形に変化させて、日本語の意味を表すようにしてみよう。

(1) I wish I (be) good at playing tennis.

「テニスをするのが上手だったらいいのになー。」

(2) I wish he (can come) to the party.

「彼がパーティーに来ることができたらよかったのになー。」

ここでまず注目すべき事は、(1)、(2)のどちらも事実とは反対の願望を述べているということである。つまり、(1)の場合には、「実際には、私はテニスをするのが上手ではない」のであり、(2)では、「実際には、彼はパーティーに来ることができなかった」のである。どちらも、「実際にはそうではなかったのだが、～だったらいいのになー・～だったらよかったのになー」と言っているわけである。

次に注目すべき事は、(1)は、「現在の事実とは反対の願望」を述べていること、つまり、「今～だったらいいのになー」と述べていること。(2)は、「過去の事実とは反対の願望」を述べていること、つまり、「過去のあの時に～だったらよかったのになー」と述べていることである。

次に英語の上でのポイントをまとめてみよう。

- (1) (1)のように、「現在の事実とは反対の願望」を述べて、「今～だったらいいのになー」と言う時には、次の形を取る。

「今～だったらいいのになー」=I wish+過去形の節

「今～できたらいいのになー」=I wish+[could+原形] の節

- (2) (2)のように、「過去の事実とは反対の願望」を述べて、「過去のあの時に～だったらよかったのになー」と言う時には、次の形を取る。

「過去のあの時に～だったらよかったのになー」=I wish+過去完了の節

「過去のあの時に～できたらよかったのになー」=I wish+[could+have+過去分詞] の節

上の2点から、(1)の文の be は、were となり、(2)の文の can come は、could have come となる。なお、Aの所で述べたように、仮定法であるので、(1)の文で be 動詞の過去形は were とする。

C. as if ~ の構文 = 「まるで～かのように」

次の文中の () 内の動詞の、適当な形を記してみよう。

- (1) Helen talks as if she (be) there yesterday.
(2) Mr. Yamada spoke English very well as if he (be) an Englishman.

as if の後に続く節の時制については、誤解があるようである。その問題の文が現在時制の時には、as if の後に続く節の時制を過去形にし、その問題の文の時制が過去時制の時には、as if の後に続く節の時制を過去完了にする、と考えている生徒が多い。しかし、これは間違いである。as if の後に続く節の時制を見極めるためには、その英文を和訳することが不可欠である。その和訳をもとに、次のように覚えておこう。

1. 「まるで～ [である・している・する] かのよう」 = as if + 過去形の節
2. 「まるで～ [であった・していた・した] かのよう」 = as if + 過去完了の節

次に、(1)、(2)の英文を和訳してみよう。

- (1) 「ヘレンは、まるで昨日そこにいたかのように、話している。」
- (2) 「山田さんは、まるでイギリス人であるかのように、上手に英語を話した。」
そこで、以上の説明に従って(1)は had been が、(2)は were が正解となる。

D. 注意すべき仮定法のポイント

空所に適語を補って、同じ意味になる英文を完成させてみよう。

- (1) Without his advice, I could not have succeeded in the attempt.
=(a) (b) his advice, I could not have succeeded in the attempt.
=(c) (d) (e) (f) (g) (h) his advice, I could not have succeeded in the attempt.
- (2) He got up early; otherwise he would have missed the train.
=He got up early. (a) he (b) (c) (d) up early, he would have missed the train.

- (1) 問題文中の **without** は、「もしも～がなかったならば」の意味である。その意味は、[But for ～] の形でも言い表すことができる。そこで、(a)、(b)には [But for] が補われる。

この意味は次のようにも言い表すことができる。

Without ～ = But for ～ → [If it were not for ～] または [If it had not been for ～] その2つの使い分けは、仮定法過去で用いられるのが、[If it were not for ～] であり、仮定法過去完了または混合仮定法で用いられるのが、[If it had not been for ～] である。問題文は、その帰結節が、[I could not have succeeded in the attempt] とあるように、仮定法過去完了であるので、(c)～(h)には、[If it had not

been for] が補われる。

- (2) 問題文中の **otherwise** は、「もしもそうでなかったならば」の意味である。全文訳をすると、「彼は早起きした。もしもそうでなかったならば、彼は電車に乗り遅れたであろう」となる。その「もしもそうでなかったならば」を具体的にすると、「もしも早起きしなかったならば」となる。問題文は、その帰結節が、[**he would have missed the train**] とあるように、仮定法過去完了である。そこで if-節は過去完了で表されて、[**if he had not got up early**] となる。従って、(a)~(d)には、[**if, had, not, got**] が補われることになる。

E. if-節、条件を明示する部分が省略された仮定法

if-節、あるいは、条件を明らかに示す部分が与えられていない仮定法というのがある。その時には、内容から、条件に当たる部分を見つけ出し、「もしも～ならば」と訳すことが必要となる。その例をいくつかあげてみよう。

- (1) Helen would have helped you.

(仮定法過去完了)

= 「もしもヘレンだったならば、我々を手伝ってくれただろう。」

主語の Helen の部分に条件が与えられている。

- (2) It would have caused much trouble for you to say such a thing.

(仮定法過去完了)

= 「もしもあなたがそんな事を言ったならば、それは大きな問題を引き起こしただろう。」

仮主語 It の具体的内容を表す、真主語の [**for you to say such a thing**] の部分に条件が与えられている。

- (3) **Twenty years ago**, your suggestion would have been accepted.

(仮定法過去完了)

「もしも20年前だったならば、君の提案は受け入れられていただろう。」

時を表す副詞句、**Twenty years ago** の部分に条件が与えられている。

- (4) You would do the same in my place. (仮定法過去)

「もしも私の立場だったならば、君は同じようにするだろう。」

副詞句、**in my place** の部分に条件が与えられている。

(5) To hear him speak English, you would take him for an Englishman.

(仮定法過去)

「もしも彼が英語を話すのを聞いたならば、あなたは彼をイギリス人と間違えるだろう。」

不定詞、**To hear him speak English** の部分に条件が与えられている。

(6) I would have bought a camera which had been cheap. (仮定法過去完了)

「もしも値段の安いカメラだったならば、私は買ったのだが。」

関係詞節、[**which had been cheap**] の部分に条件が与えられている。

F. if の省略による倒置

次の場合、示されているような形で if を省略することができる。その場合には、後に続く文中で倒置が起こる。

(1) if + 主語 + were ~ = Were + 主語 + ~

(2) If + 主語 + had + 過去分詞 + ~ = Had + 主語 + 過去分詞 + ~

(3) If + 主語 + should + 動詞原形 + ~ = Should + 主語 + 動詞原形 + ~

以下にその例をあげよう。

(1) If it were not for water, we could not live.

= Were it not for water, we could not live.

= 「もしも水がなかったならば、我々は生きていけないだろう。」

(2) If he had helped us, we could have succeeded.

= Had he helped us, we could have succeeded.

= 「もしも彼が我々を助けてくれたならば、我々は成功していたであろう。」

(3) If I should fail, I would try again.

= Should I fail, I would try again.

= 「もしも万が一失敗しても、私はもう一度努力してみるつもりだ。」

第9課 助動詞

(1) 注意すべき助動詞の意味の確認

A. must に関して：

1. You must work hard.

「あなたは一生懸命働かなければならない。」

2. You need not go there with me.

＝You don't have to go there with me.

「あなたは私とそこに行かなくてもよい。」

3. You must not smoke in this room.

「この部屋でたばこを吸ってはいけない。」

4. He must be rich to have such an expensive car.

「そのような高級車を持っているとは、彼は裕福であるにちがいない。」

5. He cannot be hungry.

「彼が空腹であるはずがない。」

must には、義務を表して、「～しなければならない」という意味がある。それを否定にして、「～しなくてもよい」という時には、[need not＋原形]、または、[don't have to＋動詞原形] で表す。また、「～してはいけない」という時には、[must not＋動詞原形] で表す。

must にはもう一つ、推量を表して、「～にちがいない」という意味がある。それを否定にして、「～はずがない」という時には、[cannot ～] で表す。

B. may に関して：

1. You may take rest if you are tired.

「もしも疲れているのなら、休憩を取ってもよいですよ。」

2. Helen may know something about the matter.

「ヘレンはその事についてある程度知っているのかもしれない。」

1. 2の例文に示されているように、may には、「～してもよい」という、許可を表す意味と、「～かもしれない」という、推量を表す意味とがある。さらに、may には、次のような用法もある。

May God bless you!

「神があなた方をお守りになりますように。」

[May+主語+動詞原形=～が一しますように] (祈願を表す。)

C. will, shall に関して：

(a) will について

1. 未来を表す = 「～するだろう」

Helen will come back in a few minutes.

「ヘレンは数分したら戻ってくるだろう。」

2. 現在の習性・習慣を表す = 「よく～する」

He will sit there reading a magazine.

「彼はよく雑誌を読みながら、そこにすわっている。」

3. 現在の主張・固執・必然を表す = 「どうしても～しようとする」

He will have his own way.

「彼はどうしても自分流のやり方でやろうとする。」

4. 現在の拒絶 = 「どうしても～しない (～しようとしぬい)」

He will not consent.

「彼はどうしても承服しようとしぬい。」

5. 現在についての推量 = 「おそらく～だろう」

Mrs. Green will be over eighty.

「グリーンさんは80歳を越えているだろう。」

(b) shall について

1. 単純未来を表す = 「～だろう」

I shall be twenty years old next month.

「私は来月で20歳になる。」

2. 話し手の意志を表す

= 「私は～が一するようにする、私は～に一させるつもりだ」

イ. She shall have a nice present.

「私は彼女がすてきなプレゼントを持つようにするつもりだ。」

= 「私は彼女にすてきなプレゼントをあげるつもりだ。」

=I will give her a nice present.

□. He shall call on you at once.

「私は、彼があなたをすぐに訪ねるようにするつもりだ。」

=「私は彼にすぐにあなたを訪ねさせるつもりだ。」

=I will make him call on you at once.

D. would should に関して :

(a) would について

1. 時制の一致で用いる

He told me that he would leave for Tokyo the next day.

He said to me, "I will leave for Tokyo tomorrow."

「彼は翌日東京に向けて出発すると言った。」

2. 過去の習性・習慣 = 「よく～したものだ」

He would play for hours on the beach.

「彼はよく海岸で何時間も遊んでいた。」

3. 過去の主張・固執・必然を表す = 「どうしても～した (～しようとした)」

Helen would go there in spite of our warning.

「ヘレンは我々の警告にもかかわらず、どうしてもそこに行こうとした。」

4. 過去の拒絶 = 「どうしても～しようとしなかった」

John would not tell the truth.

「ジョンはどうしても本当の事を言おうとしなかった。」

5. 過去についての推量 = 「おそらく～だっただろう」

I suppose she would be about eighty when she died.

「おそらく彼女は死んだ時には80歳位であっただろう。」

(b) should について

1. 義務を表す = 「～すべきだ」

You should write to your parents at least once a month.

「君は少なくともひと月に一度は両親に手紙を書くべきだ。」

(2) 注意すべき [助動詞 + have + 過去分詞]

A. 推量を表わす [助動詞+have+過去分詞]

1. He must have known the fact.

「彼は本当の事を知っていたにちがいない。」

2. He cannot have known the fact.

「彼が本当の事を知っていたはずがない。」

3. He may have known the fact.

「彼は本当の事を知っていたのかもしれない。」

must have+過去分詞 = 「～であった・したにちがいない」

cannot have+過去分詞 = 「～であった・したはずがない」

may have+過去分詞 = 「～であった・したかもしれない」

B. 本来あるべき通りではなかった過去を表す

1. You should have got up earlier.

You ought to have got up earlier.

「あなたはもっと早く起きるべきだったのだ。」

2. You should not have gone out in the rain.

You ought not to have gone out in the rain.

「あなたは雨の中を外出すべきではなかったのだ。」

3. You need not have done it for him.

「あなたは彼のためにそれをしてやらなくてもよかったのだ。」

should have+過去分詞 = ought to have+過去分詞

= 「～すべきだったのだ (が, 実際にはそうしなかった)」

should not have+過去分詞 = ought not to have+過去分詞

= 「～すべきではなかったのだ (が, 実際にはしてしまった)」

need not have+過去分詞 = 「～しなくてもよかったのだ」

(3) 助動詞を含む重要表現

1. Mr. Smith may well be angry at your words.

「スミスさんが君の言葉に腹を立てるのももっともだ。」

may well+動詞原形 = 「～するのももっとも・当然だ」

2. We may as well stay here until it stops raining.

「雨がやむまでここにいた方がよい。」

may as well + 動詞原形 = 「～した方がよい」

3. I cannot thank you too much for your kindness.

「あなたの親切にはどんなに感謝してもしすぎるということはない。」

cannot ~ too — = 「どんなに～してもしすぎるということはない」

4. I would rather stay at home than go out.

「私は外出するよりかはむしろ家にいたい。」

would rather + 動詞原形 + than + 動詞原形

= 「～するよりかはむしろ～したい」

5. You might as well throw your money into the river as lend it to him.

「彼にお金を貸す位なら、川に捨てた方がました。」

might as well + 動詞原形 + as + 動詞原形

= 「～する位なら～した方がました、～するのは～するのと同然だ」

(4) 重要な助動詞を含む会話表現

1. Shall I open the window?

= Would you like me to open the window?

「窓を開けてさしあげましょうか。」

Shall I ~? = Would you like me to ~?

= 「～してさしあげましょうか」

2. Would you like to have some more coffee?

「もう少しコーヒーを召し上がりませんか。」

Would you like to ~? = 「～なさいませんか」：勧誘を表す

3. Will you please tell me the truth?

「本当の事をお話し願えませんか。」

Will you (please) ~? = 「～して下さいませんか」：依頼を表す

cf. Would you mind opening the door?

「ドアを開けて下さいませんか。」

Would you mind ~ing? = 「～して下さいませんか」

なお、この場合には、「ええ、いいですよ」と引き受ける時には、[Not at all.

Of course not. Certainly not.]などの否定の返事をするにも注意。

(5) 慣用的に助動詞を含めて用いられる重要構文

1. It is quite strange that he should know nothing about the matter.

「彼がその事について何も知らないというのは、極めて妙なことだ。」

形式主語 *it* と、その真主語となる *that*-節による、[*It is* ~ *that* — — ということは～だ]の構文において、その *that*-節中では、しばしば助動詞の *should* が用いられる。

2. Is he mad that he should behave like that?

「あんな風に振る舞うとは（なんて）、彼は気が狂っているのか。」

[*that*+主語+*should*+動詞原形]の形で、「～するとは、～するなんて」という意味を表す。

3. Mary ran to the station lest she should miss the train.

「メアリーは、電車に乗り遅れないように、駅に走って行った。」

[*lest*+主語+*should*+動詞原形]の形で、「～しないように、～するといけな
いので」という意味を表す。

4. John came to Japan so that he might see Mr. and Mrs. Yamada.

「ジョンは山田さんご夫妻にお会いするために、来日したのだ。」

[*so that*+主語+*may (can)*+動詞原形]の形で、「～するために」という目的
を表す。なお、この場合の *may, can* は、主節が過去時制である時には、*might, could* になる。

第10課 比 較

(1) 重要な比較構文

1. John is as tall as Mary.

「ジョンはメアリーと同じ位背が高い。」

as ~ as — = 「一と同じ位~, 一と同様~」

2. Mike cannot swim so well as John.

「マイクはジョン程上手に泳ぐことができない。」

not so ~ as — = not as ~ as — = 「一程~ない」

3. Mary can run faster than her sister.

「メアリーは妹よりも速く走ることができる。」

比較級 + than — = 「一よりも~」

4. John is the taller of the two.

「ジョンは2人の内では背が高い方だ。」

of the two がある時には、[the + 比較級] を用いる。「2人・2つの内では~な方だ」という意味を表す。

5. Tom worked all the harder because he had been praised.

「トムはほめられたので、更に一層熱心に努力した。」

[all the + 比較級] を、because ~などの原因・理由を表す節や句と共に用いると、「~なので更に一層一、~なのでその分なおさら一」という意味を表す。以下に、もう一つ例を示そう。

I like him all the better for his faults.

「彼の欠点のために（彼に欠点があるので）、私はその分なおさら彼が好きなのだ。」

6. Jane can play the violin better than any other girl.

「ジェーンは他のどんな女の子よりも、上手にバイオリンを弾ける。」

比較級 + than any other + 単数名詞 = 「他のどんな~よりも一」

7. This box is less heavy than that.

「この箱はあの箱程重くはない。」

less ~ than — = 「一よりも少ない程度で~」 → 「一程~ではない」

8. Mike is the tallest of all the boys.

「マイクはすべての少年達の中で最も背が高い。」

9. Helen can play the piano best in her class.

「ヘレンは彼女のクラスで最も上手にピアノを弾ける。」

8, 9の最上級表現については、その最上級の前に、8ではtheがつくが、9ではtheがつかないことに注意。最上級については、基本的に、形容詞の場合にはtheがつき、副詞の場合にはtheがつかない。

10. I am busiest on Mondays.

「私は月曜日が最も忙しいのだ。」

ここで注意すべきは、busyは形容詞であり、その最上級のbusiestであるのに、theがつかないということである。これは、同一主語における最上級だからである。つまり、「私は月曜日が最も忙しいのだ」という時には、「他の人々と比較して私が最も忙しい」と言っているのではなくて、「同じ私でも、月曜日の私が最も忙しい」と言っているのである。このような、同一主語における最上級の場合には、形容詞の最上級でもtheがつかない。以下にもう一つ例文を添えよう。

Mary is happiest when she is playing the piano.

「メアリーはピアノを弾いている時が一番幸せなのだ。」

(2) 重要な比較表現

1. I have no more than fifty yen.

「私は50円しか持っていない。」

[no more than ~ = only ~ = ~しか~ない]

2. John has not more than one dollar.

「ジョンはせいぜい多くとも1ドルしか持っていない。」

[not more than ~ = at most ~ = せいぜい多くとも]

3. No less than fifty students were present.

「50人もの学生が出席していた。」

[no less than ~ = as many as ~ = ~も]

4. Helen reads not less than five books a month.

「ヘレンはひと月に、少なくとも5さつの本を読む。」

[not less than ~ = at least ~ = 少なくとも]

5. A whale is **no more** a fish **than** a horse is.

= A whale is **not** a fish **any more than** a horse is.

「馬（がそうでないの）と同様、鯨は魚ではない。」

[A no more ~ than B = A not ~ any more than B = B（がそうでないの）と同様、Aも～ない = 否定]

6. A whale is **no less** a mammal **than** a horse is.

= A whale is **not** a mammal **any less than** a horse is.

「馬（がそうであるの）と同様、鯨はほ乳類である。」

[A no less ~ than B = A not ~ any less than B = B（がそうであるの）と同様、Aも～だ = 肯定]

7. Tomoko can speak German, **much more** English.

「知子はドイツ語を話すことができる。ましてや英語もだ。」

8. Tomoko cannot speak English, **much less** German.

「知子は英語を話すことができない。ましてやドイツ語もだ。」

7, 8のように、「ましてや～もだ」という時には、前の文が肯定文である時には、[much more ~]を、前の文が否定文である時には、[much less ~]を用いる。なお、muchの他に、still, far, evenを用いてもよい。

9. Mike is **more wise than** clever.

「マイクは利口というよりはむしろ賢い。」

2つの形容詞を並べて、「～というよりはむしろ～」と言う時には、[more + 原級 + than + 原級]の形を用いる。この場合には、例文中のwiseのように、その比較級が—erで終わる語でも、[more + 原級]の形を用いる。

10. Mr. Smith is **not so much** a journalist **as** a scholar.

「スミスさんは、ジャーナリストというよりはむしろ学者だ。」

[not so much A as B = AというよりはむしろB]

11. Tom is **senior to** her.

= Tom is **older than** she.

「トムは彼女よりも年上だ。」

12. Mike is **junior to** her.

=Mike is younger than she.

「マイクは彼女よりも若い。」

13. This wine is superior to that in quality.

=This wine is better than that in quality.

「このワインはあのワインよりも品質がよい。」

14. That wine is inferior to this in quality.

=That wine is worse than this in quality.

「あのワインはこのワインよりも品質が劣る。」

11～14では、ラテン比較をまとめよう。

[senior to ～=older than ～=～よりも年上だ]

[junior to ～=younger than ～=～よりも若い]

[superior to ～=better than ～=～よりもすぐれている]

[inferior to ～=worse than ～=～よりも劣る]

なお、これらの表現中の to は前置詞であるので、その後には代名詞を置く時には、目的格とすることにも注意。

15. I prefer taking a walk to watching television.

=I like taking a walk better than watching television.

「私はテレビを見るよりも散歩をする方が好きだ。」

[prefer A to B=like A better than B=BよりもAの方が好きだ]

なお、[prefer to + 動詞原形 + rather than + 動詞原形] という形もある。

I prefer to take a walk rather than watch television.

16. This book is as interesting as any I have ever read.

「この本は私が今までに読んだ他のどれにも劣らない程、面白い。」

as ～ as any = 「他のどれにも劣らない程～」

17. He is as gentle as ever lived.

「彼はこの上もなく温和だ。」

as ～ as ever lived = 「この上もなく～、肩を並べるものがない程～」

18. I was not in the least surprised at the news.

「私は、その知らせに少しも驚かなかった。」

[not + in the least = 少しも～ない]

(3) 注意すべき形容詞の比較級・最上級

1. **The former part of the lecture was not so interesting as the latter part.**

「その講演の前半の部分は、後半の部分程面白くなかった。」

the former = 「前者 (の), 前半の」

the latter = 「後者 (の), 後半の」

2. **He is the last person that would tell a lie.**

= **He is the last person to tell a lie.**

「彼女は決してうそをつかないような人だ。」

この場合の the last は、名詞の後に続く形容詞句・節を否定にする。そこで訳す時には、その名詞の後に続く形容詞句・節を、「決して～しそうにない」と訳して、前出の名詞に戻る。この例文に即して言えば、形容詞節の [that would tell a lie], 形容詞句の [to tell a lie] を、「決してうそをつかないような」と否定に訳して、前出の person に戻る。

(4) 同じ意味を表すさまざまな構文

1. **John is taller than Tom.**

= **Tom is not so tall as John.**

= **Tom is less tall than John.**

「ジョンはトムよりも背が高い。」

「トムはジョン程背が高くない。」

「トムはジョン程背が高くない。」

2. **Helen is the prettiest of all the girls.**

= **Helen is prettier than any other girl.**

= **No other girl is so pretty as Helen.**

= **Helen is as pretty as any girl.**

「ヘレンはすべての女の子の中で最もかわいい。」

「ヘレンは他のどんな女の子よりもかわいい。」

「他のどんな女の子もヘレン程かわいくない。」

「ヘレンは他のどんな女の子にも劣らない程かわいい。」

3. **This is the most interesting movie that I have ever seen.**

=I have never seen **such** an interesting movie as this.

=This movie is as interesting as **any** I have ever seen.

「これは私が今までに見た映画の中で最も面白い。」

「私は今までにこれ程面白い映画を見たことがない。」

「この映画は私が今までに見た他のどれにも劣らない程面白い。」

第11課 名詞・代名詞・冠詞・形容詞・副詞

A. 名詞

(1) 注意すべき不可算名詞

次の名詞は不可算名詞であるので、

イ. 冠詞の **a, an** をつけない。

ロ. 複数形にすることはなく、常に単数扱いとする。

ハ. 「たくさん」、「少し」、「ほとんど〜ない」と言う場合には、形容詞 [**much, a little, little**] を用いる。

→ advice, fun, furniture, baggage, news.

There is too much furniture in this room.

「この部屋には家具が多すぎる。」

(2) 集合名詞の数の扱い

class, team, audience などのように、「二人以上の人が集まって構成されているもの」を集合名詞と呼ぶが、その数の扱いには注意が必要である。その名詞が、「その集団」について述べている時には単数扱いとし、それに対して、「その構成員」について述べている時には複数扱いとする。

The audience was composed mainly of young people.

「その聴衆（という集まり）は、主として若い人々から成り立っていた。」

ここでは、「その聴衆」という集まりについて述べているので、単数扱いされる。言い換えると、この場合、「主として若い人々から成り立っていた」のは、「その集団という集まり」なのである。

The audience were moved to tears by his speech.

「聴衆（の人々）は、彼の話に感動して涙を流した。」

ここでは、「その聴衆」を構成する人々について述べているので、複数扱いされる。言い換えると、「彼の話に感動して涙を流した」のは、「その聴衆を構成している人々」なのである。

B. 注意すべき代名詞

(1) 代名詞の **one** と **that** の使い分け

次の文中の空所に, one か that を補ってみよう。

- (a) The houses of the rich are usually larger than () of the poor.
(b) “Do you need a ball-point pen ?”—“Yes, I need ().”

このような問題の場合には, 1. まずその空所に補われるべき具体的名詞を補う。
2. 次にその名詞につく冠詞を調べる, という手順を踏むとよい。問題に即して, 具体的に解説してみよう。

1. 具体的名詞を補う。

(a) The houses of the rich are usually larger than (houses) of the poor.

(b) Yes, I need (ball-point pen).

2. 次にその具体的な名詞の前に付く冠詞を調べる。それに際しては, the についての次のポイントを活用するとよい。定冠詞の the は,

イ. 特定のものを指すのに用いられる。

ロ. その名詞に限定する形容詞句が付く時に用いられる。

なお, この場合の, 「限定する形容詞句」とは, 名詞の後に, [of~] の形で与えられていると考えてよい。

(a) houses の後に, 限定する形容詞句の [of the poor] があるので, the を用いる。

(b) この場合には, 特定の「ボールペン」を指しているのではない, 言い換えると, 「ボールペン」ならば, どのようなものでもよい。そこで, 定冠詞の the ではなくて, a を用いる。

3. 以上のように, [冠詞+名詞] とした時に:

a + 単数名詞 = one, 冠詞なしの複数名詞 = ones

the + 単数名詞 = that, the + 複数名詞 = those

とする。そこで, (a) では those が, (b) では one がそれぞれ補われることになる。

(2) 注意すべき one と the other

すでに登場している名詞を, 2つ以上のグループに分類して説明する時には, one, another, the other などを用いるが, その使い分けは重要である。

I have bought three books. One is written in English, and the others are written in French.

「私は3冊の本を買った。その1冊は英語で書かれており, 後の2冊はフランス語

で書かれている。」

I went there with four persons. One was my father, another was my sister, and the others were my friends.

「私は4人の人々とそこに行った。その1人は私の父で、後の1人は私の妹で、残りの2人は私の友人だった。」

このように、すでに登場している人や物を2つ以上のグループに分類して説明する時には、その最初に登場するものについては、単数ならば **one** で、複数ならば **some** で表す。

その最後に登場するものについては、単数ならば **the other** で、複数ならば **the others** で表す。

その間に登場するものについては、単数ならば **another** で、複数ならば **others** で表す。

(3) 注意すべき再帰代名詞

1. 形容詞の名詞形+itself=「～そのもの」

Helen is honesty itself.=「ヘレンは正直そのものだ。」

2. 前置詞+oneself

by oneself=「独りぼっちで」

for oneself=「独力で」

in oneself=「それ自体としては」

of oneself=「ひとりでに、自然と」

beside oneself=「我を忘れて、取り乱して」

The old man lived in the cottage all by himself.

「その老人は全く独りぼっちで、その小屋に住んでいた。」

She was beside herself with joy.

「彼女は嬉しさのあまり我を忘れた。」

C. 冠 詞

(1) 注意すべき冠詞の用法

1. 不定冠詞 **a, an** について:

Take this medicine twice a day.

「この薬を一日につき2回飲みなさい。」

この a は, hour, day, week などの時間の単位を表す名詞の前につけられて、「～に, ～につき」という意味を表す。

Mary and Jane are of an age.

「メアリーとジェーンは同じ年だ。」

この a は, 「同じ, 同じような, 同種類の」という意味を表す。

2. 定冠詞 the について:

Sugar is sold by the pound.

「砂糖はポンド単位で売られている。」

by the + 単位を示す名詞 = 「～単位で, ～あたりで」

He caught me by the sleeve.

「彼は私の袖をつかんだ。」

Henry patted me on the shoulder.

「ヘンリーは私の肩をたたいた。」

上の2つの例文のように, 「AのBをつかむ・たたく」と言う時に, そのBに当たる名詞が, 「服や体の部分を表す語」である時には, その言い表し方に注意が必要である。

「AのBをつかむ」= catch + A + by the + B

「AのBをたたく」= pat + A + on the + B

(2) 注意すべき冠詞の位置・省略

1. We elected him chairman.

「我々は彼を議長に選出した。」

この英文は, We が主語, elected が動詞, him が目的語, chairman が補語となる, [S + V + O + C] の第5文型である。この英文のように, chairman, president, mayor, governor, director, captain のような, 地位・役職・官職を表す名詞が補語である時には, その名詞には冠詞がつかない。

2. Mary is so kind a girl that we all like her.

= Mary is such a kind girl that we all like her.

「メアリーはとても親切な女の子であるので, 我々は皆彼女のことが好きだ。」

[so, as, too, how] の後に, [形容詞 + 名詞] を続ける時には, その語順が次の

ようになることに注意。

[so, as, too, how]+形容詞+ a +名詞

ただし, such の場合には, [such a+形容詞+名詞] となる。

3. Young boy as he is, he is very brave.

=**Though** he is a young boy, he is very brave.

「彼は幼い少年であるけれども、とても勇敢だ。」

このように, [名詞・形容詞・副詞+as+主語+動詞] の形で, 「～だけれども」という譲歩を表す。その時には, その名詞につく冠詞は省略されることに注意。

D. 注意すべき形容詞と副詞

注意すべき形容詞と副詞として, 特に次のものをよく覚えておこう。

of+抽象名詞=形容詞 *eg.* of importance=important など

with+抽象名詞=副詞 *eg.* with ease=easily など

This tool is of use to us. =useful

「この道具は我々にとって役に立つ。」

She pronounced those English words with accuracy. =accurately

「彼女はこれらの英語の単語を正確に発音した。」